活動報告

ロレンツォ・デ・メディチ研究所における絵画カリキュラムについて[1)]

野 村 正 則

Painting Curriculum of Scuola Lorenzo De' Medici

MASANORI NOMURA

はじめに

1988年8月末より11月中旬までヨーロッパにおける美術研修[1)]の機会を得た。

そのうち9月10月の2ケ月間はイタリア中部のルネッサンス都市フィレンツェ[2)]に滞在し，イタリア各地のルネッサンス絵画を鑑賞する一方，ロレンツォ・デ・メディチ美術研究所に在籍し絵画実技の講座を受講した。この講座は比較的初心者向けに設定されたものであったため，自己の絵画をはなれ，造形の原点にたちかえって基礎造形の大切さを再認識することができた。また通常1ケ月で完了するコースを2ケ月間受講したことにより，講座全体のカリキュラムの流れや変化，前月との違いなど比較することもでき，指導教官カテリーナ教授[3)]の指導法やカリキュラムの組み立てなど，多くの初心者向け実技指導法を学ぶことができた。今回はこの講座のカリキュラムを紹介することにより，初心者向け絵画指導のあり方について考えてみたい。

ロレンツォ・デ・メディチ美術研究所

この研究所は，近年までフィレンツェ市の中心ドーモ広場の南面に本部を置いていたが，現在はドーモ広場から北にのびるリカソーリ通り9番[4)]に本部を置いている。絵画，彫刻，グラフィックデザイン，写真，工芸，美術史等美術の全般に渡る講座を有するとともに，語学講座も併設し世界各国からの留学生を受けいれている。しかし，これらの講座は本部のある一ケ所で行なわれるのではなく，市内各地の古い教会や，家具工房，作家のアトリエ等を使用して少人数で実践的に行なわれるといったユニークな方法をとっている。

私の受講した絵画コースは，フィレンツェ駅（フィレンツェ・サンタ・マリア・ノッヴェラ駅）より徒歩5分程東側のファエンザ通り43番[5)]にある古い教会をアトリエとして使用していたが，初心者向けのためかドローイングコースと曜日を決めて交互に使用していた。また語学教室も隣接していて基礎課程の拠点といった感じがした。

絵画コース

絵画コースは1ケ月コース，3ケ月コース，

1）本報告は1988年度別府大学短期大学部国外研修のひとつとして別府大学及び私学研修福祉会の助成を受けたものである。このことを記して，ここに感謝申しあげます。

2）Firenze

3）Professor Katherine Desjardins.

4）Via Ricasoli, 9 (Lato Duomo)

5）Via Faenza N.43

6ケ月コース，1年コースがあるとのことだったが滞在期間の都合上1ケ月コースを2回受講することにした。1ケ月コースの所用時間は，週9時間，1ケ月4週で計36時間である。9月の最初の週は5日月曜日にオリエンテーションが行なわれた後，一日3時間づつ3日(火，木，金）開講されたが以後は，1日4.5時間づつ月，金の2日となった。この点に関してカテリーナ教授から「せっかくフィレンツェに来たのだから素晴しいルネッサンス美術をより多く鑑賞してほしい，ついては美術館の休館日の月曜日と他に1日のみ金曜日をレッスンに当てる」との説明があった。

絵画コースのカリキュラム

1．クロッキー（3時間）

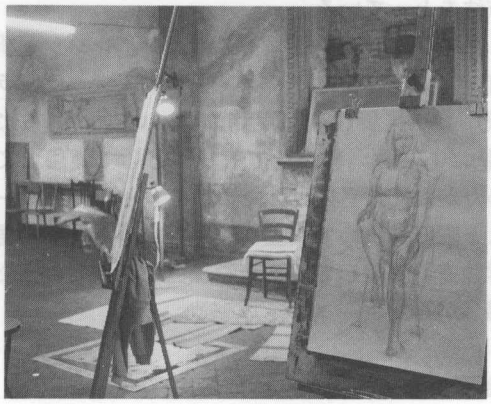
鉛筆で裸婦のフォルムをとらえる。1ポーズ10～30分ぐらいで，両足で立つ，棒にすがって立つ，イスに座るなど10ポーズを描写した（写真－1）。

2．明暗表現（3時間）

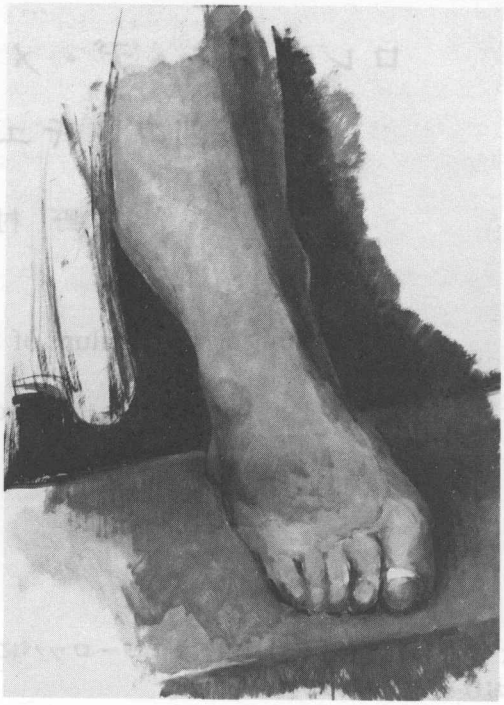
習作用の紙（50×70cm）に油絵の具を使用，色はチタニウムホワイトとピーチブラックのみ。イスに座っている裸婦の手か足のみを描くよう指示された（写真－2）。

3．スキンカラーの表現（3時間）

肌の色には，ピンク系，オレンヂ系，茶系の3種類があることと，それぞれの系統の構成色の説明後，イスに座っている裸婦の手か足を描くよう指示された。また，この日のモデルはピ



写真－1　クロッキーとアトリエ内部



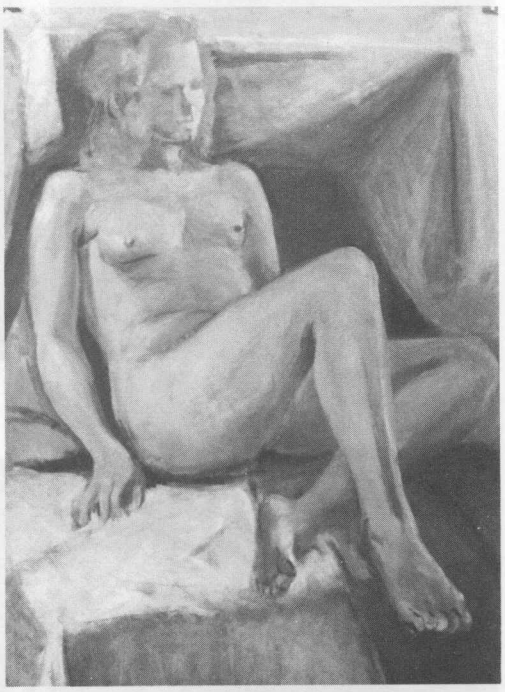
写真－2　「足」の白黒のみによる表現

写真－3　「手と足」スキンカラー表現

ンク系の肌のため，カドミウムレッド，カドミウムイエロー，イエローオーカー，レモンイエロー，チタニウムホワイト及びやや冷たい肌色を得るためのウルトラマリンを使用するのが望ましいとの説明もあった。むずかしい課題とは思われなかったので，手と足両方を描いた（写真－3）。

4．マイナス表現（4.5時間）

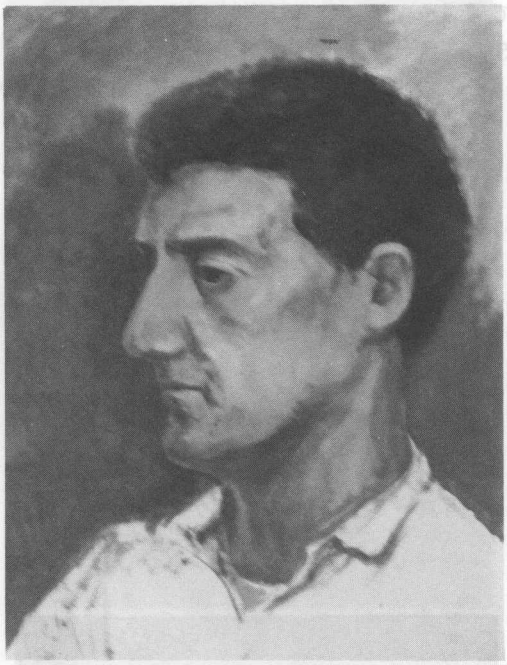
写真－4　マイナス表現された人体（長浜克彦氏[6]の習作）



写真－5　裸婦習作Ⅰ

6）建築家，イタリア語習得のためイタリアに滞在中，1988年10月ロレンツォ・デ・メディチ研究所，絵画コースに在籍

白い紙に着彩するというオーソドックスなプラス表現に対して，紙をアンバーやオーカーな



写真－6　男の顔

写真－7　男の上半身

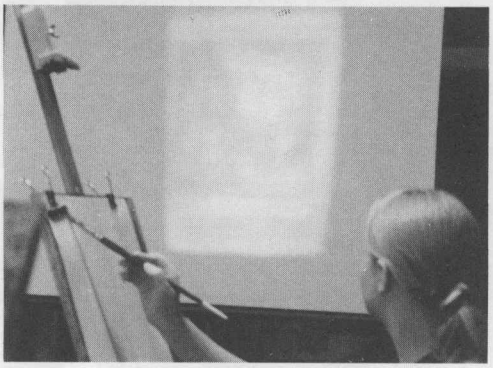
ど低明度のモノクロームに塗った後，揮発性の油で拭き取っていくというマイナス表現によって裸婦を表現した（写真－4）。

5．固定ポーズⅠ（9時間）

ここで初めての固定ポーズを描いた。茶系の肌のモデルの座ったポーズを紙（50×70cm）に油彩で（写真－5）。

6．固定ポーズⅡ（9時間）

男の着衣像の固定ポーズだったが顔を大きく描くようにとの指示であった。2日間（9時間）の課題だったが，2日目は描き続けることに限



写真－8　最初のピンボケスライドとそれを見て描きはじめた学生

写真－9　ややピントを合わせたスライド

写真－10　ピントを合わせ正しい位置に置かれたスライド

写真－11　ピンボケスライド（写真－8）を見て描きはじめた頃の習作

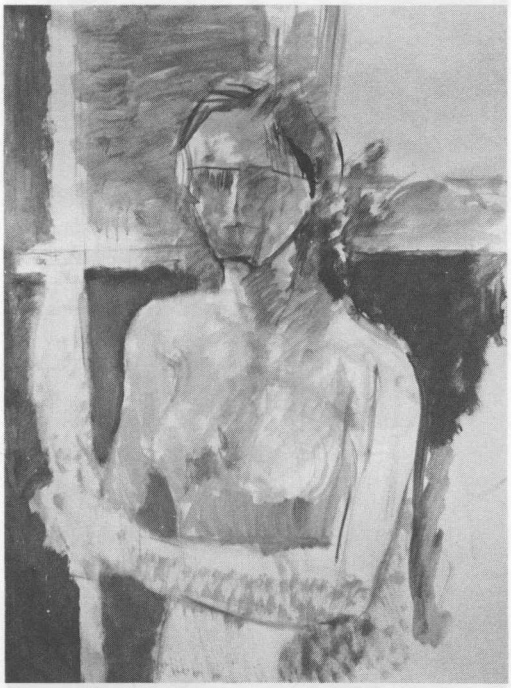
写真－12　ピンボケスライド（写真－9）を見ながら描き終えた頃の習作

界を感じたため教授の了承を得て，上半身を描いた（写真－6，7）。

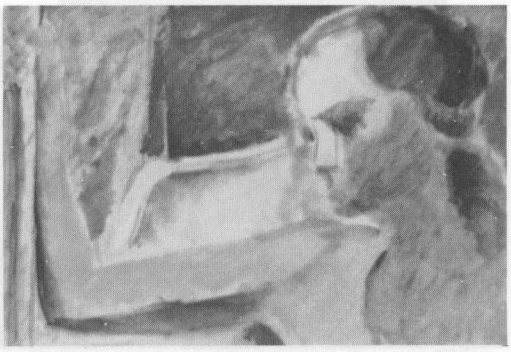
7．色彩のコンポジション練習（4.5時間）

スクリーンに映し出された完全にピンボケのスライドを見て，各自の画面に色を置くように指示。10～20分ごとに少しづつピンを合わせて行った（写真－8，9）。

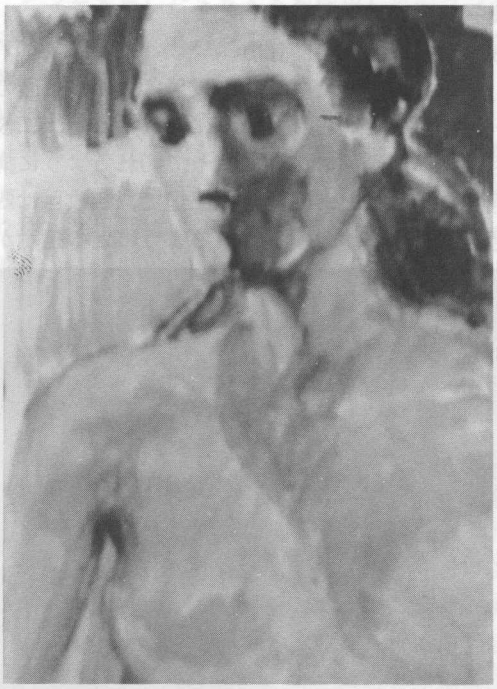
3度目のピン合わせで色面がほぼ決定すると描画は打ち切り，スライドのピンを合わす。よく知っている名画の左右や上下の反転や，裏返しなどが表れる（写真－10）。その描画過程（写



写真－13　人体を1辺でカットした構図



写真－14　人体を2辺でカットした構図



写真－15　人体を4辺でカットした構図

写真－16　用紙1/4のスペースに人体を入れた構図

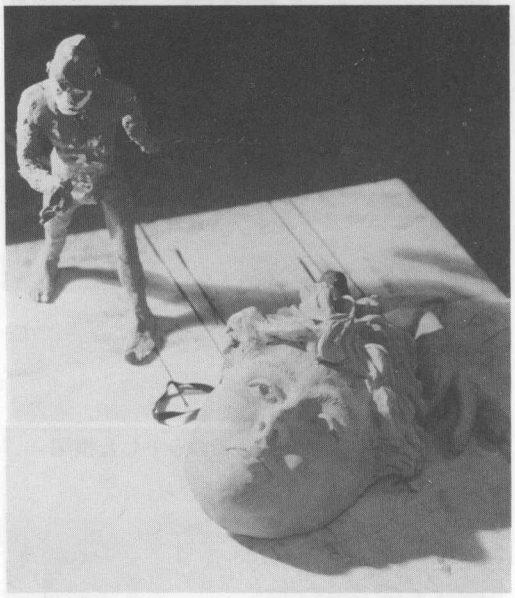
真—11・12)。

8．構図練習（4.5時間）

人体を部分的に描く。一枚目は人体が画面の一辺によって切られるように入れること，二枚目は人体が画面の二辺によって切れるように構図を考えること，三枚目は三辺で，四枚目は四辺全部で人体がカットされるようにとの指示があった。また最後の一枚は画面の1/4のスペースに人体を入れた構図にするようにとの指示であった（写真—13〜16)。

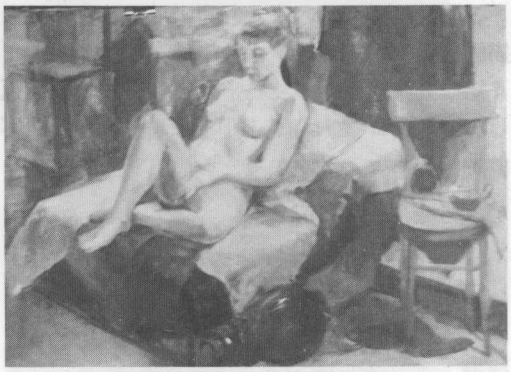
9．コントラスト練習（4.5時間）

モノクロームの静物4種（ピンクの炊事用手袋，うるし塗りの天狗面，ブルーの石コウ小立像，テラコッタのマスク）を強いスポットライ

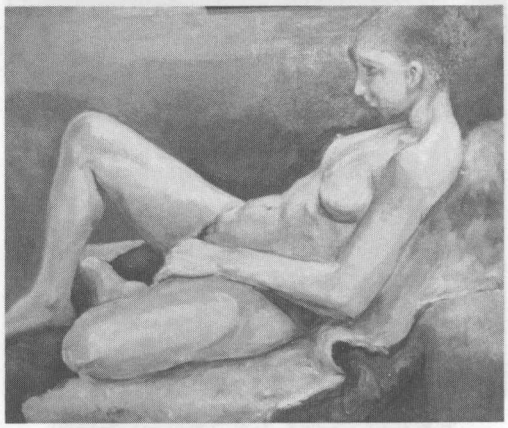


写真—17　モノクロームの静物

写真—18　モノクロームによる表現



写真・19　固定ポーズIII



写真—20　人体を画面いっぱいに入れた習作

写真—21　固定ポーズIIIのためのバック設定

トの下で一点づつ順次与えられた（写真―17・18）。

10．固定ポーズIII（7時間）

もたれる裸婦を回りのスペースを大きく表現せよとの指示（写真・19）。

11．固定ポーズIV（6.5時間）

IIIと同じポーズを見る位置を変え，人体を画面いっぱいに入れよとの指示（写真―20）。

12．コンポジション練習（4.5時間）

写真―22　油彩によるコスチューム習作

写真―23　パステルによるコスチューム習作

ピンをずらしたスライドを使用してのコンポジション練習。9月（7，で紹介）と同様のためここでは略す。

13．固定ポーズV（9時間）

着衣の女性の固定ポーズで2回続きの題材だったが最後の日は油彩で描くと持ち帰りに困るため，2日目はパステルで描いた（写真―22・23）。

考　察

以上紹介した72時間（2ケ月間・17回）のカリキュラムは，私の知り得る範囲の日本の美術学校と少し趣を異にしていた。また1ケ月コースを2ケ月に渡り受講したため，10月に入ると大部分の学生は新入生となり，私達が9月に学んだカリキュラムをほぼ同じペースで練り返す結果となり，自分の前月のカリキュラムを客観的に理解することもでき，また前月との指導法の違い等も比較することができた。以下日本の指導内容との違いを主に考察してみたい。

1．習作用紙について

日本では油彩を紙に描くことはむしろタブー視されている。戦後の物不足の時代を除けば，学生であっても習作時よりキャンバスを使用するのがあたりまえになっている。しかしこの研究所で使用した習作用紙は適度の油の吸い込みにより乾きが速く，絵の具ののりも良く非常に描き易かった。しかも安価（50×70cm大・500g約20枚が400円程度）であり，仕事の速さと枚数が要求される習作にとっては大変便利な素材と感じた。日本に帰って何種類かの紙で試みたが，安価な画用紙では油性分の吸い込みが大きすぎ筆さばきが悪く非常に描きにくい，むしろ

7）国際照明委員会（CIE）では1931年に標準となる光源を次のように定めた。

A光源：タングステン電球による夜の光を代表する光源

B光源：太陽つまり正午の昼光

C光源：太陽光に青空の光の加わった昼の光

この中では，C光源が，晴天時の北窓からの昼光のことでもっとも色を見るのに適した光源である。

ケント紙やクロキー用紙などコーティングした紙のほうが筆さばきが良く描き易い。習作段階ではキャンバスにこだわらず，仕事が速く安価な紙を使って，多くの体験を積むことの方が絵の具の性質や物の見方を学ぶ上で効果があるのではないかと感じた。

2．光線及びスポットライトの使用について。

晴れた日に北窓から入る自然光は色を決定する基準[7]にされることでも解るように最も美しい。日本の美術学校ではほとんどが北窓のアトリエである，また人工光線を用いても，この北窓の光線になるべく近くなるよう一方向からやわらかい光を設定する場合が多いように感じる。古い教会を使用したこの研究所のアトリエは自然光は全く望めないために人工光線を使用しているがライティングの方法が今までの私の体験とまるで違っていた。天上からの螢光燈は自然光に近く気にならないがモデルやモチーフに対しては更にスポットライトを当て強い明暗を作り出す。特にモデルに対しては左右からスポットライトでライティングすることにより，人体の表面に強い明暗の違いをつくり出し，初心者でも面の方向の違いを容易に理解できるように配慮され感心した。また光をあびた明るい人体と暗いバックとの関係は空間の意識を喚起するにも効果があり，強烈なコントラストはまるでバロック絵画をみているような印象であった。

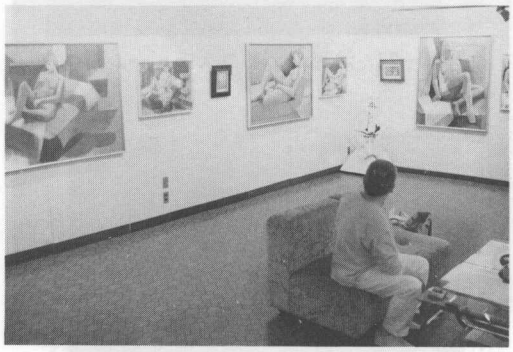
3．指導について

指導のテンポは非常に早く，1ポーズ（日本では普通20分だがここでは40～60分）中に1人に対して1～3回のアドバイスがあった。

このため指摘された所を直しているともう次の指摘をされるといった調子で，じっくりと考える時間はなく，半ば教授のペースで描かされているといった感じであった。この事の善し悪しは別にして，教授の色彩に対する感覚は非常にするどく，少しでも調子の甘い部分があると「モアウォーム」「モアクール」「モアダーク」などと的確に指摘され息をぬけなかった。私が今まで学生を指導する時などは全体の雰囲気が良ければ部分に多少色味の気になる所があっても妥協してしまっていたが，部分の色彩の違いも徹底的に指摘されると，それが積み重さなって全体の色調が厳しくなって整うことが理解でき，徹底した色彩指導の必要性を考えさせられた。

4．物の見方について

9月の第1日目は裸婦クロッキーだったが，10月の第1日目はモデルが居るにもかかわらず新入生は自分の手をデッサンするように指示された。しかもその方法は最初の1枚目は，自分の手を見つめながら鉛筆で描くのだが，自分の描く用紙は見ることができない姿勢をとらされていた。右脳と左脳の機能の違いも説明していた事から推測して，K・ニコライデス[8]の純粋輪郭画法[9]を試みていたのではないかと思う。概念による見方を迂回する試みはピンボケのスライドを使った指導の際も取り入れられており，教授が初心者指導の有効な方法の一つとして概念くだきを考えていたことは確かであり共感した。



写真―24　個展風景（イタリアでの習作とそれを基にした帰国後の作品）

8）Nicolaides, K. The Natural Way to Draw. Boston：Houghton Mittlin, 1941.

9）盲目輪郭画法とも呼ばれる。この描法は，自分がどう描いているか見えないようにすることにより，第一に眼の前にある視覚情報（描こうとする物）に注意をすべて集中すること。第二に見ているものだけを描こうとし，知っている物を描こうとする気持（概念視）を迂回する効果があると言われている。

おわりに

ロレンツォ・デ・メディチ美術研究所における2ケ月間は，自己の制作に行きずまりを感じていた私にとって多くの考える時間を与えてくれた。また初心者に対する指導法は得る所が多く今後の学生指導に大いに役立てたい。

また，1989年6月1日～6日にはラ・ポーラ大分[10]に於て，今回のイタリアでの研修の報告を主体とした個展[11]を開催した（写真24)。

最後に指導教授の所見（英文）をもってまとめにかえたい。

参考文献

ベティ・エドワード[12]北村孝一訳「脳の右側で描け」1981マール社

滝本孝雄・藤沢英昭「入門色彩心理学」1977大日本図書

---

10) 大分県別府市新港町4-7

11) 野村正則個展―イタリア美術研修とヨーロッパの旅展―御来場・御高評下さいました多くの方々に感謝申しあげます。

12) Betty Edwards "Drawing on the Righe side of the Brain" 1979.

LORENZO DE'MEDICI

LINGUA ARTE CULTURA

STUDENT REPORT
FOR
MASANORI NOMURA

1. Art Professor's Views on Student's Work

Nomura attended my painting course here at Centro Lorenzo de'Medici for during the months of September and October 1988. The course consisted of 9 hours weekly in-class instruction of oil painting techniques using nude models, still-life objects, as well as a brief series of exercises from "Great Master" paintings.

During this relatively short period of 2 months, Nomuri and I worked closely together on strengthening particular aspects of his painting. Such aspects included: modulation of form through colour, intensification of colour, composition and description of form through the use of various brushstrokes.

Nomura's serious attitude, strong discipline and attentiveness to my suggestions not only made him a pleasure to work with, but above all the very evident and excellent progress which he has made in these two months.

Without doubt, Nomura used his experience here at Centro Lorenzo de'Medici to it's fullest and I highly recommend him for any further travel/study or scholarships which he might pursue in the future.

Florence, 28th October 1988

Katherine Desjardins

PROF. KATHERINE DESJARDINS

SCUOLA LOR. MEDICI

2. PROF. Katherine Desjardins - drawing and painting professor at Lorenzo de'Medici.

50122 FIRENZE (ITALIA) - VIA RICASOLI, 9 (LATO DUOMO) - Tel. (055) 28 31 42 - 28 71 43 - 26 35 14 - Telex 573671 Medici